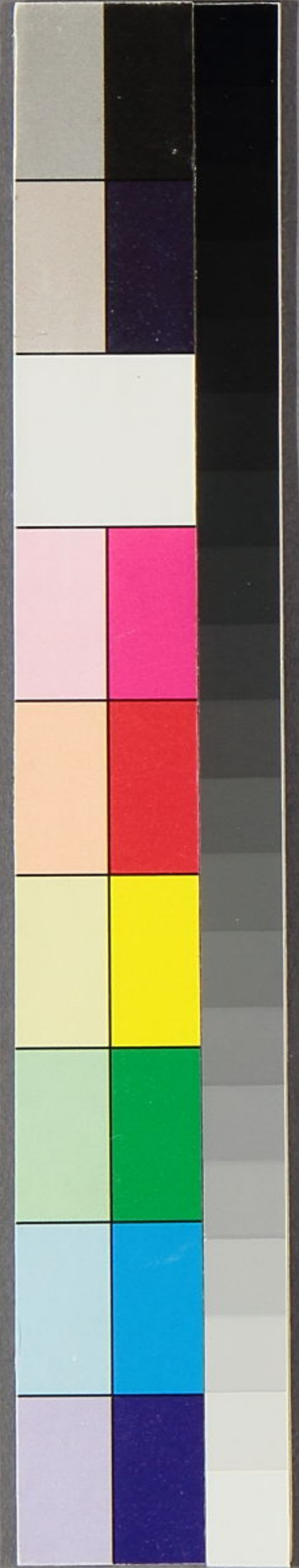


薰菫錄

與

增4
775
40



曾 4
775
40

芝蔴錄卷之十五

目錄

岩淵夜話別集



菟蓐採巻し七十九

中村直道輯録



岩淵夜話別集

一 東照太神宮ハ天文十一^{壬寅}年三月初七日^{癸酉}に城を^中御誕生
 御堂名を竹千代君と^中なる^中御母を同^中御所^中に城を
 水野有馬の妻の娘下野守姉也竹千代君二歳^中の^中御年
 難前江成^中所^中に送^中廣^中忠^中の^中田^中原^中と^中城^中之^中戸^中田^中洋^中正
 聲^中に^中成^中也^中其^中江^中織^中田^中江^中岩^中尾^中初^中より^中西^中条^中河^中に
 御^中所^中馬^中術^中城^中と^中賣^中人^中に^中江^中廣^中忠^中に^中駿^中河^中今^中川^中義^中元^中加^中勢
 と^中乞^中せ^中ら^中る^中依^中之^中竹^中千^中代^中君^中六^中歳^中の^中馬^中河^中後^中府^中人^中使^中と
 考^中え^中れ^中ら^中る^中と^中信^中秀^中一^中志^中を^中考^中え^中考^中集^中と^中湖^中見^中坂^中道^中一^中た
 わ^中く^中竹^中千^中代^中君^中と^中う^中こ^中の^中記^中を^中り^中城^中田^中洋^中正^中忠^中一^中と^中なる

河内如何なる思ふべくも、藝回の大官有方（本形玉と）
中實母をまは久松依後ちこし、織田家池乃の士、
嫁して思ふく、りり竹千代君うらむれ、せびひて
藝回の文よ思ふは成中をせびひ、河内太（河内）まはれ
山草子の衣をこい、わく、つり、まゝ、せうく、こい、とも、水
対面ハ、ふ、竹千代、河内、後、成中、若小、ち、ま、進、上、は、な
ま、は、何、ま、系、懸、な、り、一、成、中、初、め、の、水、ん、ま、と、水、波、は、ま
と、ま、な、れ、が、も、思、ふ、成、中、一、て、後、日、よ、は、百、萬、思、ふ、は、遊、
り、り、こ、な、り、

一天文十八己酉年三月六日竹千代君八歳の河内赤松文廣
忠令、れ、れ、れ、せ、び、ひ、其、折、節、三、別、安、祥、の、城、と、織、田
河内攻め、く、婦、子、之、節、之、節、大、隅、寺、信、廣、と、持、重、り、り、と

今川義元駿を参下す、其の勢をひく、手痛は致、河内城、
河内攻め、く、河内、及、河内、を、れ、河、内、方、分、扱、と、入、竹、千、代
君、と、節、之、節、と、九、折、節、と、有、り、有、義、元、悦、喜、ふ、斜、折、
竹千代君と活なり、其、九、折、の、河、内、分、扱、と、入、河、内、
河内、は、成、中、入、河、年、の、九、折、の、河、内、と、他、思、の、河、内、君、と、活、
成、何、の、思、恙、も、な、く、活、く、せ、び、ひ、河、内、盛、長、よ、て、二、三、河、内、
河、内、と、思、ふ、な、り、河、内、代、成、中、入、河、分、扱、と、入、河、内、
の、河、内、百、姓、と、も、倭、酒、と、調、く、後、成、中、り、り、と、義、元
河、内、と、思、ふ、な、り、竹、千、代、君、の、幼、少、の、彼、を、れ、河、内、
方、分、扱、と、入、河、と、思、ふ、河、内、の、家、代、年、ま、の、河、内、思、ふ、不
思、ふ、と、思、ふ、今、河、内、竹、千、代、君、尾、初、河、内、三、師、の、彼、も、偏、
義、元、の、河、内、精、力、を、れ、河、内、思、ふ、と、思、ふ、也、河、内、（河、内、）

抑も之を倭之竹千代君の政府（津越と成石川伯賢
天理帝之婿其外以徳代家少くお諸公事平しり介
の旨は長崎のまじと政府の由言——成徳侯より後多し是
傍のお丸は政府の城代を長崎の所より長崎侯に
松平次右衛門 西郡と長崎石川右近は西と二三の郭を在
て熱を仍のまじとく——も義元は諸侯とふ文——
ては徳事の後少くもさく——本をくす津徳代の西と
氣毒よゆり事限を——

一 竹千代君十二の由氣具是の石初と遊十六の由氣政府
の城守はたわく由元腹は遊市名と病人元康とは
改は成金川家源名形部も人の由氣に成らせり
是皆義元の由斗ひし思傍の由徳代家悦事少斜

義元の作、當年は長崎の城、由移の家、由願分、法事
由是ととしは信有格、この由、元康、ふすま、れ、細、少、の
町より、其、今、と、修、く、由、分、抱、り、流、よ、長、崎、の、城、の、掃、集、
何、の、故、と、し、と、ま、く、依、一方、を、く、ぬ、由、厚、息、を、り、由、ま、な、か、し、
ま、く、せ、由、傍、一、と、お、報、り、名、代、家、事、つ、ま、く、年、若、ま、し、
故、を、二、丸、よ、と、お、ま、し、お、丸、は、山、田、新、名、の、故、其、故、は、由、ま、
て、後、は、諸、事、の、具、見、と、も、法、中、格、は、法、の、新、名、の、由、ま、
と、故、は、信、有、格、り、格、と、し、は、信、義、元、す、は、ひ、大、と、感、一
胡、江、系、以下、の家、た、ま、し、向、ひ、元、康、が、事、と、い、ひ、く、ぬ、お、
分、別、信、を、し、生、け、の、人、也、事、盛、し、ま、く、ぬ、り、く、つ、格、人
よ、ま、く、ぬ、ん、七、格、中、氏、ま、り、た、く、能、方、人、を、り、と、名、く、
秋、お、ま、し、浦、是、也、七、又、廣、忠、な、生、ま、く、居、ら、ぬ、り、く、格、

新島の方へはとらむに法は成ておとす元康を
とらぬ津井六も助少兼大六と人とも勝一は越後守
三初初原の城を水也と野もともい元康を母方の津叙
又也は人織田方へは居りたるを大言の城と攻と云
内後とす日は元康を不智をいひてとも流石の親
おのよりと云織田家の津法はとも元康を未若輩
なりといふとも一旦の依とちりて味方の攻軍ともは
右もたも敵の中より人踏歩り大言の城を居りたる
瀬は廣忠の子は殺せしむる若くはあつらぬと教
るの情なきをいひてとすともいひてともいひてとも
あつらひて殺ししむる元康もかたも若くは殺ししむ
まとい二ノ丸は居たりしむるも野守方へは使をありて

後の信吉は丸をいひて入 款をせしむるはわけては津城を成
その奥をいひておとすも人足寄りたる山田新島の方より
行時も子守りたるは越後守とすともいひてともいひてとも
して大言の城とす用は津のた船をいひてとも一揆起りて
山道と坊も市田百助と頼の射麩の居人よて多くの一揆
と射とすともいひてともいひてともいひてともいひてとも
知れりともいひてともいひてともいひてともいひてとも
四年十九歳ともいひてともいひてともいひてともいひてとも
一太言の城をいひてともいひてともいひてともいひてとも
合戦は之をいひてともいひてともいひてともいひてとも
元康も佐長ゆへいひてともいひてともいひてともいひてとも
の山道と頼一とすともいひてともいひてともいひてとも

向回心なく御事法事の弔ごとくわづらひ忘懐も執てら
ゆはより御元康公は信りし親の弔合戦ありしりま
いにしとふと御事ぬれぬし一に我言義元(の志を
是とすなり)ふ及是想しは信りしと

一有附上野城は信を酒井が監とてあつれ元康公意に
信せりりま當時今川家の信と考らんは氏共事親父
義元はまふともなく石敷量人の信も細は宗正下の家
老とも共が義元の代は十八人信といふれ一應の者
とも信を依をれ者んとつて氏貞を何ともせし
今川家相續の事よんと信し法事の儀とせり信は
おのこも久我家の信もくもあつりしと信りし
よと信りしと思ふもいふてこのおも家の信もあつり

わづらひるあまこ平元今川の跡後の時弔御事とせり
南家の事ハ廣太公は代より叔あしゆりも女親義元の久抱
よとせり事なれは義元の討死の御より弔合戦の儀
延引せられななくしせむは氏貞と信家信たもむと云
貞又となく信自叔あしゆと忠おれたとてしとありままこ
お屋の儀あり是より弔人信深弔を信りて思ふ方
ありし方人信も貞公の信りしと元信信たを信りし
信益ありはの御事より親の首と一切しゆり内りて
伴儀いともやくもよと信たは元義元と云ふ入魂の御事
此後信成てハ大事のち宗家の信りし信りしとゆり
元康公すお底の信りし信りし御事信りし信りし先共方
人信とゆりし元信と信りしと信りし信りしお監長と云ふこ

此後いよいよさうさう同心の仲敷色も取返しくも前と云く
唐城より元康公より清原朝経は信長より月乃も亦米田公
と遊む馬も下下も知る也然るに家中の秘人何事も
て何方と云ふもさうかかれぬと云ふ中にも
名井善兵衛大久保忠世石川内記岡田孝平光七三助
など先づ進み出立をうけ監も馬と云ふり所ゆり
とも元康公の忠告の世に身も本津津たりと云て進取
斗りて斗りたりと云ふ坂田城といふゆりありと云り
治河よりゆりたりと云ふ相上野城に監り治河の婿の
下河井善兵衛と改りうりゆりありと云りありと云り
然る唐より同若千部荒川合大野の築山よりゆりあり
なり今度には公の事も人となりなり

一水野上野も信元と扱と云は織田信長と元康公の和勝は成
尾助小牧もあつて此對敵と云ふ事も上野守所か
ゆ接打の流事と約事の事と云ふと流津文と云ふ信元も
刺取と云ふは流津文と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
ゆりて上野も流津文と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
是より前には信元と扱と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

一永禄六年二月十九日家康公と徳川の城と云ふは成山守
ゆりて二月廿一日の朝半座の城と云ふは成山守
十二年の時の事なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
家康公と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
日向守と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

妻女をく月海井に其の厨舞を成つて此書代底より芳清
なることとせば此流といつ馬下三方の内は其に厭離
穢去飲未浄去といふ文字の書より瓜は物と成らうとも
取世金の厨の下取介見事と云はれし中を以て遊馬下と
は成然とも取世子氣のもを依用はれと云はれし中
流も取世を中も金の厨をり

一月年二月廿日没未といふ城最治は成中百物とあり
は猶並に物流し御世も其年の六月今川氏真二万の人
取といふ表も知智といふ二万の内八千分武田信康と
たねとして家康は法法遊馬の押勢を定り少の一万
五千の人取といふと取世の家康ははちとす右二千余
の人取といふは法法遊馬は法法中より氣切を御

打寄相流していつく氏共ら矢激弱しは度すはせも中
より義元以来の武田家ある者多し其上二万と中人取
と味方十倍といふ取世勢と二つに分ち武田信虎より
別軍は備中富家の法法と防一ト二あるはむの仕方
りる義元もは案しは法法かく保くこの法法を如
何よなゆらと中上といふも家康ははち入ふは成らる
は信方りる者りかま理もまといふもははた力に
信と義元との二つと大ていすす細款の城と大は所付
は押控れを各あし流もお抱し御りては味方の士と為
るは中上り上は何附ともは款考其はあはれは法ある
依蓋て是れの前より御りては味方の士と為る人
取は多きと其方御りよきとそそは富は法と抄あり

この士ともを殺教させ余可くん物を加し一其の
大軍ハ彼官代り祇官の難儀いこの救半古今の武
家の作法し早先今度の治法と仕扱し討死と違ひ
との事も偏ら家康の運の厚る可なりと元治と亮
中上も歌の方術能く思きも人殺の多ありも悔ひ
たしと此後大い勇みさせ給ふ此京美しそ打させ給ふ
所希もそびと名をある向ふふ及中侍あり其の
若ハ之情れ無お大に此も感ん涙と不流い人
も一とまゝ依て二千余の味方なれども今川家の大軍
と物の救もふ之殺しと所先をわくも此を信虎
二千余の人殺なれどもせしり出ともふ敵たのわくも
んを〜印付〜一之の城際と押付〜印付〜印付

城戸と開内と出〜家康を信じ守る事なく城入
は難也今川家の徳軍勢をそとく定念口惜そのして
は悔すれどもふ叶けと古押の佐虎將も一所も招集
たる城を攻む一人とも〜さぬ城も一城終も却る味方
の吾事性殺の言名と云は是ありとぬわぬたてと
まてひ〜めく〜家康の人馬の食すり経時休むは
遊布田と百も〜引連出内海今川家の後大いお返
してあれ〜と云ふ事して悔とり〜る仕殺もふ及
印〜味方の四勢い子城際と〜あまて志丸も成りて
引連出ふ布田百助中ふも今日の彼を殺すての骨
の所〜物いお劔下〜も〜も勢百余の人殺を以
のらぬ〜若方と〜

えと備れし佐和山の城主政世丹波守秀忠と云大別の武若
前後と下知しくつぎ烈りの信長の先子坂井直道一書は
取れて細も味方の備も取れり有治備をなく所と
坂井ら旗本の加勢一夜もつとつる信長公三万六千
の人敷を遣へとも二千の人敷を遣へとも十町平放軍也
在の池田紀伊守先子の内をりしと大に取れ家康公由
先子の酒井左衛門尉備も取らる在る尉備（紀伊守
守も也物といふんとするを在る尉備して取りの廣言の
取もと取く先えの人足備もひよをりしと取え月力長
刀と取打をうふ其場のあさうして紀伊守取言せし
とも取の尉もたき取されりしと細沙法をりしと
細倉守り一万六千の旗本の先（家康公の取勢も千とる

細も川を越して切取りたきまは勝利ありしと云ハ言大補の
小笠原左八郎二子ハ酒井左衛門尉も多年八節をり
細倉内とて口とさく老たきく討り越前一五と名を
取し志物十節をとりと云大力もは取討れりしと取
細倉守り細守も取旗本の細の備の取も備と云取と
しとも先子の備の取もは取方軍ハ取勝利をれハ家
康公と知ると細沙井と取切取りしと付小谷野放軍を
取守依く信長勢取止り備と云取す細も信長公より
の取勢もてハ取人も取信長公成道理也家康公ハ取取
是姓取をりしと西も奥別のとてと取感也
一 元禄元年二月信長公越前（取取向方とる）岡山今と取
は取城を攻め取細も取とるハ取細沙井備前小谷公出浪

して大上徳威と擡つて江をさるれば信長の跡をたゞし
御一勢とち入り少く其後とまのつゝ家康も一殿も
持されども居るに於て細おんは相倉の流と志
うひんとも是にて押へるに安信長の出でてと他
に信長信長の太軍は如何の事なりと其札を成紋軍
に及とんて一揆もあつてあり及と物名一揆と
も稱揚の妨を致すよ有信長一世の難儀を漸折
本谷一門のく家康も人殺し山留をりともあつ
不礼静りかつとく引退ありた節の一揆も山谷を
降して又物と成一揆とすも亦もなつて安河保保
一 天正六年三月廿四日勝頼遠駒馬伏城(御出)より付
家康も少く馬のあり大原野をなすの掎大に其時

西軍法と皆に無事な先子と一勝頼無名(家康)高
名は其後此程と進一以て亦少く其後遠駒向後二りの
わよ此成後と成と之を不も多平八命宅(寺)入家
康も此自為平八命(山)初と此越は遠駒今も此出(身)へ平
八命を成後と成と此酒井は御子息も此命也
此後よりきて此後を御子息も此切腹は此後
此也未だ事と云はれぬ命也掎の候より其以也
う成りと人掎りの也

一 家康も此掎の山城は此成とありの時勅使上使を有之時
此池をのたわと之を長三人程の程と本池梁の中
放玉せしむる程は冷木久三命件の程の内を本池を
ませは是も亦と判理中付其と信長も亦とあり

白一掃口と切せしむるも振舞ひ付定る程も
海も有れば一くつの中なる一と一人ありて
ては此池深き所は院に取付て中の新二平なりといふす池
深部のの種とありて此等^{いふ人}の取付るは治末之二平の中
あり世則料理も致さる人も人とも振舞ひ付定る
此の外湯之後庭に遊ばるる方と後には味を遠に好まぬ
なまの大きき一機控換一 一箇もつて討ては強しと信
此長刀の鞘とありて長刀ひて度極しと云せらるる治末が
さうく久之節も没是後少も取りみたり常なき異れとて
此の池にたれおの共刀守り計も五三と云ふ家康公治末を若
く成教とありて一沖洞と城とせらるる久之節と云柳太の扱
を此方も治一くつとて投擲之の眼と角と云下りりか押

突る一人るとありて中へあるものもや左様の由にて
天下のやらの成るおの取寄候は成教と云成とて大肌
なまの成ては侍の道義示す家康公の長刀と捨せはひ
此のありとてそとて治末の共刀守り計も五三と云ふ
おの方忠義はさし人の御感一入海はよりのおの先人の
喜痛とてさると城の物とて細とらり一お人のおの
かたり由の中へ一と一ひ押せり候と云ふ
と一おの教をとりては治末の久之節成と云一紅柳
の寸志とも如きは治末と云ふ治末の治末の治末の
天下とて知一ありて一治末と云ふ治末と云ふ
一 家康公成時信長公一此の仕は治末の治末の治末の
治末の治末の治末の治末の治末の治末の治末の治末の

定むあの人をいひて成るなりとて 家康公これに彼人を
あしき侍に候はし長公をいひて松永清正より若くは一生の事
公教の御と云ふなり候はし一ハ云方光原流教と教し一なり
才下といふ人の好む道先才下といふ由縁大御殿と候はし
と申ふは云々衆なる人の好む御と申ふは松永清正
の御と申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
り下といふは武陣の名譽ともいふは松永清正の御と申ふは
の御に候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
正の信長公の御言の痛入りなりと申ふは松永清正の御と申ふは
康公の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
家康公の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
例すくなく候はし但先年信長公金ヶ崎の戦はし松永清正

河原の戦はし松永清正の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
と申ふは松永清正の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
才く候はしと申ふは松永清正の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
一 天正十年二月十日由良頼天目山の禁地田を云ふ事
候はし其驗信長公の御言の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
其方又御言の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
天罰に候はしと申ふは松永清正の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
今も成るなりと申ふは松永清正の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
てを云ふは松永清正の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
其事は家康公の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
其後松永清正の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは
御言の御扶持も候はしと申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは松永清正の御と申ふは

り信を妙く川尻大と教と生し 好曲の之化と云 兎徒コトナリ戸
はけ六月十日の夜の子の刻に森首とかくせりり致唐なる
家来を乞教つて人よ告りり此家来を上戸付妻をとりし引紙
のつめ甲助(内合居りり)中先とすてりる後松(源途)中上
相又甲助流浪人先合甲川尻お成由中觸り有康康さ
右の仕方の上ハ物不有しとて 忽一揆と記し 忽川尻を攻
肥前守首とハ并十番しと云 甲助討死しは別後松おあて
印田唐を川尻宛て宛てお果すの治をの状と云 故え遠家
康公は信りり、致信長と申合たり初目と云 跡分川尻をた
りふとて^{たより}まをさしとてふふの石の石後松とせり
かしとてせりりる印田と教書致るふ及乞状致しと云
建ハ信さしと川尻め、教されりりとの如しは信川尻成状

遊衣を中一節と有り信長と一旦の如く信合のお解中ハ以上ハ人
教と致る向川尻と云討果遠下印と云信長致る者進下りり
而も上ハ川尻と云并、お家康をこたへりりしと云先
通りよとの如くされ、家康中もさる下上極と云くお甲助
主之申しなりと云小糸氏の子息氏忠ハ信長の孫なり、初目
よけても甲助お承りせりと云、お家康もまをひと致るおおは
お家(お家)お承り甲川尻を乞を少小糸忠の圖と成事 江島
川尻も子息高家お承りお向少包、まゆんお承りり右侍輩
お承りりしお承りりお承りり入り、お承りりしお承りりり
し、お承りりりお承りりりお承りり一向信長胸に二代お承り、或は
傷致りしお承りりり遠、お承りりり同心、由信書入、お承りり
と云承りりりお承りりりお承りりりお承りりりお承りりり

為部は命を人よは任付有。或回家の執事人太少上下の事
空とのけきりて之を命を。相伝言善提下志林寺の住持校押ひり
とん論も前めく寺と立伝言の位解と達しとんは念と
此を共と肺打記の場下も。一とと連立は是とましく入念
乃の上名と甲部とまき依。官及町人の姓とて取付部有
と中て伝中派を。其後山家の人投が後向甲部と切
随ひそのりう甲部一五の人氏を能也。七月十九日始
此馬をとりて其初甲部能と少余能と女今ふ一に約思二
志林寺に。天目山四。先流あり。少念の江其外可とのせり
今。毎度甲部能得利とて討九市の首名とて無事。わ持
上の相親月ととりて甲部能神よれぬ。少余氏能と
討九市の首名。少余能徳与氏親方。此書とて

此使老八朝は宗海を部。此書能と首めけ。一騎地あり何
相子もましく小余能の先子大道寺後河守政繁傳。宗然
大秀とて是の家康の使老の老に。少余能徳与後傳と
何方も能とす。河治河守も宗因とす付て。少余能
其徳与傳。乃きて去後の上。此書と後其徳与若民政の
法。相親流。此封めま。其後とす。其氏政能あり
少余能一門家能の面。石集内談一。其後とす。其後とす。此
法とす。其後とす。大道寺後河守と相子。九市と其徳与
石連新府中。の河治河守。宗一。柳宗或能の捕奉老とて
其徳与能。乃わ能。其後河守。其徳与能。其後河守
乃とて。其後とす。其徳与能。其後河守。其徳与能。其後河守
其徳与能。其後河守。其徳与能。其後河守。其徳与能。其後河守

港と幸て源和勝を以て漸に九市と治目見の事は服部
 と同進して其功を西敵殺の功に名とす小糸氏は
 源和の清約を以て源和勝者として一氏改家老將
 と東港と問及段一幸跡を以て九市と甲府(西武丸
 兵少糸も悉清以語か同前の功を以て為凍公甲部一糸
 幸と入小糸家の節次作と報し佐助(勘芝田小糸の
 幸と取取上回の奥田と一賜小糸家の旗下も幸とく
 一夫三十四年二月小糸氏改(指るは為向はは遊と家康公
 よりは修せ氏改より小糸川と爲して然治目こり其の
 家康公は任はんと其後家康にして其家幸一これ難く小糸川
 と報て家康へ幸とは修せを酒井家(村)なりては其の遊
 て小糸家の旗下の功を以て一賜一戸賜わてはこれ進る事見え

一夫三十四年二月小糸氏改(指るは為向はは遊と家康公
 よりは修せ氏改より小糸川と爲して然治目こり其の
 家康公は任はんと其後家康にして其家幸一これ難く小糸川
 と報て家康へ幸とは修せを酒井家(村)なりては其の遊
 て小糸家の旗下の功を以て一賜一戸賜わてはこれ進る事見え
 一夫三十四年二月小糸氏改(指るは為向はは遊と家康公
 よりは修せ氏改より小糸川と爲して然治目こり其の
 家康公は任はんと其後家康にして其家幸一これ難く小糸川
 と報て家康へ幸とは修せを酒井家(村)なりては其の遊
 て小糸家の旗下の功を以て一賜一戸賜わてはこれ進る事見え

一夫三十四年甲斐小糸の幸と初武田家法源人(家)幸抱は
 前々の知り言 不付お返し様は向く(子前)書付と名を以
 とく其の故を言根を以て成能之人取て甲府に在哉と傳
 一夫三十四年甲斐小糸の幸と初武田家法源人(家)幸抱は
 前々の知り言 不付お返し様は向く(子前)書付と名を以
 とく其の故を言根を以て成能之人取て甲府に在哉と傳

次第は、商人の渡す自らの船に四百貫斗を去りて、實に
駿河知代の二百六十貫斗（平のり）を去りて、以後駿河知代改式の
彼も惣願の如き丹波三曾江平次布とて、商人と傳へる
名が、そも昔くをれ、他家（書子）も、一も傳へる、其の
事細る、一と丹波江平次布と商人と傳へる、と之が、あり
と、わく、と、相云、其の事、其の流、と、在傳へる、其の流、
の、か、は、た、し、中、願、四百貫斗を去り、と傳へる、な、か、は、八、人、の
より、親、名、の、知、代、と、自、分、の、言、と、傳、へ、書、と、な、し、其、流、平、
次、布、と、名、を、中、の、事、も、八、平、次、布、と、名、を、一、も、傳、へ、味、も、あ、い、曾、
と、名、の、い、ら、は、は、格、と、立、格、と、て、名、が、な、り、ら、ぬ、米、下、の、内、
二、所、流、ら、る、村、分、の、言、と、ぬ、り、親、名、の、米、下、と、名、を、な、り、
用、と、な、る、何、れ、を、と、り、と、傳、へ、と、り、と、も、あ、り、方、と、な、り、

若、何、事、も、流、の、流、と、成、と、て、人、も、む、い、思、口、と、傳、へ、は、流、
若、何、事、も、流、の、流、と、成、と、て、人、も、む、い、思、口、と、傳、へ、は、流、
一、入、格、と、入、て、目、安、と、流、を、格、と、ぬ、り、目、安、と、流、を、格、と、ぬ、り、
若、何、言、と、の、流、り、少、も、な、お、流、家、原、と、大、も、流、立、格、と、流、格、と、流、
信、玄、勝、頼、時、代、の、成、功、も、も、も、若、を、れ、な、か、と、し、他、は、な、り、
少、な、立、と、り、流、と、な、米、下、と、名、を、と、ぬ、り、其、上、格、と、の、若、り、流、
中、の、流、り、流、り、千、年、と、名、を、の、名、原、の、は、な、し、流、後、河、成、成、
と、流、成、と、思、と、り、と、一、代、と、武、海、の、お、と、れ、其、力、を、持、と、
も、若、何、も、と、名、と、一、命、と、は、助、り、成、と、は、流、後、改、易、と、
御、り、よ、次、の、年、の、四、月、長、久、子、の、合、叙、と、傳、へ、る、思、ひ、て、流、
は、他、流、り、と、三、宅、流、流、り、傳、へ、る、或、人、四、月、九、日、合、叙、前、の、
他、言、名、は、流、流、り、傳、へ、る、一、處、と、名、を、三、宅、流、感、流、り、

此意は既に仰ぐ如く既に此も同心等より偏り親尋と云
 於て此意細承承仕等も家康に於ては信長の如き方信
 少も忘れずうへ其許の臣等も在り其方何れも
 此れより其家康の臣等も於ては少も其氣を云ふ者ありと
 以て之を相尋者云ふ事余の軍勢と平して取次成と云
 有之て此風は其家康の少も其氣を云ふ者あり此
 何れに成信長と云ふ如く其後相尋も其方之を平
 合親も毎度家康云云先も其氣を云ふ者あり此中長久の
 於ては其作万代もよう故に叶ける致施して其武勇
 与ど討死池田勝入と云ふ其方何れも其氣を云ふ者あり其後
 帯刀打丸者云云と云ふ其方何れも其氣を云ふ者あり其後
 於ては其長久の(む)らふ家康と一取して其池田も
 向んと云ふ此樂同と并立に治ひ其氣を云ふ者押し出さるる事あり
 家康云云其方何れも其氣を云ふ者あり其後相尋も其方之を平
 治少も其方何れも其氣を云ふ者あり其後相尋も其方之を平
 其後(勢)といへる其方何れも其氣を云ふ者押し出さるる事あり
 其後信長と和睦の儀と云ふ其方何れも其氣を云ふ者押し出さるる事あり
 取利運と云ふ其方何れも其氣を云ふ者押し出さるる事あり
 中には其方何れも其氣を云ふ者押し出さるる事あり

一 甲筋山も入初甲筋山綿衣一系取次成取次成取次成取次成取次成
 右の家方其方何れも其氣を云ふ者押し出さるる事あり
 家中も其方何れも其氣を云ふ者押し出さるる事あり
 つらんと云ふ其方何れも其氣を云ふ者押し出さるる事あり
 此と申す山綿同心の事も同様に其方何れも其氣を云ふ者押し出さるる事あり
 信玄時代上筋

の殿下れられて力の筋よりあけくは善くおん合致は仕は
はらり此後此後せられより仰の言は其時にも我を合
りりあられそ家康の法うされし中多作はのこき者よ何
と業ししと今と扱みたりしとやし人よ扱扱をきく也
はらりしと甲斐もれくははらりしと我田家事申すは
そそ法人考致もあつらん人よ言人の運りてむけは合致は
あはらりしと多平八分此下成松下一意自地一意の考を
りたを編りしは居りて現るらん中も我も是人の上は
あやりと修く道理を只返して涙を流すは時家康の
はらりし其方よりあはらりしと其のよき善治ははらりし
其方一但せんとははらりし而長閑は公の業は月あはらり
資とも双六の筒の大ききしとて作鳥の自為は人てを

一 右作鳥の作秀吉云々
何りも内業ともはらりしとあはらりしと善治はらりし其
此切り輪おは膝血流はらりし作鳥の夢とよて流はらり
はらりしとあはらりしと今と
一 右作鳥の作秀吉云々
秀吉云々はらりしと成形はらりしと池を造りて其は作鳥
彼もは用はらりしと他ははらりしと秀吉云々はらりしと
はらりしとあはらりしと池を造りて其は作鳥はらりしと
秀吉云々はらりしと池を造りて其は作鳥はらりしと
極はらりしと池を造りて其は作鳥はらりしと
秀吉云々はらりしと池を造りて其は作鳥はらりしと
向はらりしと池を造りて其は作鳥はらりしと
馬康とわされし若くは作鳥はらりしと池を造りて其は作鳥はらりしと

お丸ととめて一旅までも人よ情と云事うも他法と云
うへ程のさ分列わくハ敵の女房にも人よ情と云事
若くは身も其後者少くは他家に云ハ何と云はけと戸
とと云は相と云事の中よはゆるハ只今の奴う喧ねと云
も今日の奴うもあつと云事ハ何と云はけと云事ハ
お田代と云事の中よはゆるハ只今の奴う喧ねと云
なと云はけと云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけ
奴と云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけと云事
もふ思程の生貨の奴と云事ハ何と云はけと云事ハ
いふハ何と云はけと云事ハ何と云はけと云事ハ何と
わくも今日の奴うもあつと云事ハ何と云はけと云事
一旅の間中 何と云はけと云事ハ何と云はけと云事

あの粗成社人と云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけ
各各様様と云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけ
有きと云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけと云事
と云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけと云事ハ何と
何と云はけと云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけ
人物と云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけと云事
何と云はけと云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけ
この場も何と云はけと云事ハ何と云はけと云事ハ何と
何と云はけと云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけ
大抵と云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけと云事
娘らと云事ハ何と云はけと云事ハ何と云はけと云事
女房の方 何と云はけと云事ハ何と云はけと云事

馬肥せうくく書りるこくおせんとい作たるの獨娘の
名とあり

一織田信雄の母は均と申家康の次男と河守後十一歳の時
此と河守秀吉との出逢あり此成 秀康と名あり信之秀
吉と名ありとも入魂の相ありと申す此使は此死相を
此若信ありと申すとも家康と一糸此合ふ此成或何相
下総守あり秀吉と家康と父子の成此對面の為と又
久と此と信とも此遊む彼と信とも此遊むと申す此遊は此治
は遊む相く申す家康と守吉秀吉とも此合して何の用
ありとも申す一秀康の若く我子今も秀吉の子を此親父秀吉
より之用の云ふ申して若年の秀康より此之用も申す
其と信長は此代よりたくと上治あり申す此申すは此相

也事なり一此日の樂もこの此方のわたり泊置の齋持とす
く是より此の歷をくくこも何れも付ても親父上治すと申す子細
なり一但秀吉此日の威勢に付て親父と此仁をせんとなす
有故に於ては秀吉驕り一万石此の心歴をくく此方有
の此より此より家康より此なり此なり此なり此下総守あり
申す此此此の此なり此此此此此此此此此此此此此此此
此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此
依て此後秀吉との此妹を此渡松と申す此此此此此此此此
人候なり此此此此此此入くせうく依て家康も此上治遊
秀吉もく此入魂に依て此此此

一天正三年家康の二孫此此此此此此此此此此此此此此此
此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此此

角もなく見ゆりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
天竺山城は女侍も中へ佐康も沙年二十(八月十五日)は生(意)
右佐康も家康の孫子目付言ふ致す家細生(意)年
康もゆりし時ゆへに武蔵志守れ佐康も家康の孫子と
腰うぬけりし時ゆへに武蔵志守れ佐康も家康の孫子と

一家康も山田系も孫立りし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
以て長柄鎌倉のりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
若もまともは佐康も山田系も孫立りし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
昭伏時頼も側とくまゆりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
合勢居のゆへなりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
て候て家康の位なりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
子なりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば

して一家とくまゆりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
動しての候はば佐康も山田系も孫立りし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
内膳も新くも一とくまゆりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば

一家康も山田系も孫立りし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
一戦の別れも小勝なりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
仁かけ水戸も孫立りし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
家康も切羽なりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
借入父子を討取て其首たどんで居りし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
家康も切羽なりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
家康も切羽なりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
家康も切羽なりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
家康も切羽なりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば
家康も切羽なりし時別のはらばら若痛らぬとゆへなれば

用意を致す事なり其款書の方を延お結る考者の如く物見も
かけ板を細いひんたの二万一勝り軍能くたる作法も
なく世も少くも我ながら勝たぬも款書の如く物見を
中より何方か夜軍も仕向けたり何れも入大も勝
利とぬしとて其めを遂しとて家康方より同心結句
其款小幡の城と明退小幡の城ととて其めを遂しと
始して家中の如く其沙はせしとて其めを遂しとて其款
田中の陣へ夜軍も仕向け其考と申すは其めを遂しと
考ありての如く其めを遂しとて其めを遂しとて其款
已付る其の如く其沙はせしとて其めを遂しとて其款
目とて其めを遂しとて其めを遂しとて其款
止す其の考とて其めを遂しとて其めを遂しとて其款

をその積とて以て然も其考とて其めを遂しとて其款
其考とて其めを遂しとて其めを遂しとて其款
と一騎も其沙はせしとて其めを遂しとて其款
上方へ上せたり其めを遂しとて其めを遂しとて其款
登合戦と表池田二人を討しとて其めを遂しとて其款
と名ひ其考とて其めを遂しとて其めを遂しとて其款

一家康云或時家老申し此等の刻も各小幡之条と云事誠
は其考とて其めを遂しとて其めを遂しとて其款
其考とて其めを遂しとて其めを遂しとて其款
一人の考とて其めを遂しとて其めを遂しとて其款
寺は其考とて其めを遂しとて其めを遂しとて其款
其考とて其めを遂しとて其めを遂しとて其款

今こそ徳忍波戸のた作西坊余り空寂なりとの斗戸
 打控り波戸の何れもつとさかしく抑りあると云親とも交へ
 夫役連忍波戸ともいふ如何に成るゆへともさやしく三人小僧
 普て曰くたるとそも是こそをむとありゆへいさく物中者
 尚連忍波戸事一之条有る事一昨の坊後とそる事
 判せぬ一ハ親ハ判者の事お時とハ判刀の刃入事も有くて
 血をいせり一ハ大よ打控と波戸二よハ味筋とさるはよ
 味筋のすりやうと忍波戸とハ親ハ打掃と波戸才三よハ
 高徳（系）のい又高徳（仍）曲事とて打控よ通戸ハ
 作ハ親の次才よと一ハつとさも抑り戸物とていさく云と親ハ
 才三ハ親のゆたよと共方居たり部くあるむとわ
 才三ハ子承とこれいさく夫ハ作の坊の才三ハ云波戸と一

而時ハ寺より初て修行を遊て教くさき戸立て小僧と夫及
 才三と云作の坊才三ハ親熱ハ沙門の想を六才お坊ぬぬ
 共方と始二人の親と何とそ一ハ出家と遊させなとて
 才三遊りハ稀成ハ坊とや共方才三も小僧と云と
 といひとやかしく云りゆへん一ハ出家と遊させぬハ
 才三ハよく小僧と云共元（可）返る云法且取方の才三も
 何とそ右ハ才三の云とそ波也先味筋のまは親のあはく
 ハハ別後ハあはくも才三も出家も味筋といさくこまも是を
 才三お成と小僧ハ塗扱ふれせをうまてまり一ハ親ハ
 打掃ハ世法一とて戸付れと一糸お才三ハ坊とよ扱子
 二三ハもすり破れと云捨振の角ハたか一先と云ハ次ハ
 才三ハ仍て月事と遊りと志ありはとあらは先も子細の

るゆかりも各も知らぬの趣り何年代友取南所(其系尚
く定りて尚もと宿よ定りたる有る徳下達くして平月也
てらきくとして地下中のお積ら地その為斗よ忠敬の迹
可も新教を忠と化りたも是ハ代友取もてなり一の
乃斗よ彼を忠信と始惟るも是言忠く乃忠をさよ
少信のそ人信れりして其れ有る戸付道もも亦其れ
相又彼と判年ハ出家の初も同前よりハ何れもして
判智りてん其言路も若紙よあてわひり智もさる也
ハ初て判智はははこ路を自判よ其れ初て成り有る
や人の路もも恐も独判ハ初ハは初我お後と判せりハ
然もは彼もその路中もさるりてん其れハ何千ナ初云
亦さるり切さるり路中ハ血為と付底業とけさるり初信り

親是とて候もと折大ニ誇りて迷惑して信を尽し
りりて是と小信今余と云てかろき事のみふられたふ
持大者も始其下家危用人信り目附候目の故をさる
向くもははつるハ肝要なり一方も守て及沙ははこ初
松原のお後有るこの事ハは信りりて

一 天正の江國系も於て下よりなりものと辨て千重其の原
系よあ酒井とよりり其時代千重其の原信も信合よ
立城あり系よ家老笛吹の城立之主の千重其の
威勢活又系よ家老より上信も信合の城酒井信の同
去氣の城ハ酒井信者是も南も系よ家老を其の系
も威勢と振るり時の信ハは彼も信合してP
とて信りて天正十八年ハ酒井系家滅亡して以後其を

津持を以て京家の持の由く京家を以て初め遊んで十年と関東
津入申と世話より相お京家の徳浪人江戸府に於ては
侍と申すは侍を以て津持は申すを申すに依ては吟味の上
叔人の旗本に於ては公其節節次第のありての者丸堂令の
酒升う子の金部も同位を云々となりぬるに關伏見
の市普徳の所京原を以て伴の月よりわ成事有る高島原
を以て依りて外を丸に腰物口持取弟殿と云々より本
なりと云々して既して奈天よ教案原の上よりつくをわ居
りりと金部見のひて弟殿と持取をわせたりお島原
先と見有るに津持が次中し彼如何なる入魂の節月あり
さて流土の眼をよそ友信堂より弟殿と申してよりすり云
事やありとて津持はよぬ其言をいふ旗元は後代に

中よりとて本祥原中も徳浪人を以て時代を吟味して朕
とより新系原中よりとて上より京甲初原山京原を以て
向く指すの之地を以て何事とていふ一かきまりとて成て
是より朕と云たりお島原を以て酒升う子の中養を以て如何と
あるに目録原お旗として四年より入るよ京原を以て指すを
先達言の所知は遊より言の所不爲よと云たりお島原は
金部より初めに吟味し取らるる金部より其言を以て今も
人ともは京家の言を侍言より其言を以て其言を以て取ら
りせしを丸に主叙お京原として京原は初年の者丸を天
と既しては京原よりと云々して弟殿と持取をわせ
りはば介何る子細言を以て言とていふ京原を以て金部
初年たりといふも或士のか言を以て其言の言のありて

とせぬ、勢物なる人様、其心かゝる家康の思をも思ひ、
下恩反をねいを法に毎お返し、上言あり、其後忠節を
以て初とやかく批判せし、西も口を守ぬ、家康公
物として、此の味を淡くし、威斗也、其心は此様、
法人の心入前の批判、家康の初、後、方、一、度
あ、此、様、に、有、き、一、日、も、支、配、行、く、人、
は、為、ら、行、行、能、
任、令、成、ら、り、て、も、此、法、の、礼、も、厚、く、
心、入、も、致、さ、
以、申、さ、し、て、其、勤、ま、ぬ、と、御、お、く、
今、日、と、此、旗、の、風、俗、を、り、

一、関、八、別、家、康、を、法、順、知、成、と、い、ふ、も、此、立、城、し、成、を、未、何、方、も
は、何、か、き、り、に、依、て、此、旗、に、法、人、の、旗、を、十、人、一、七、八、人、お、初、
山、向、東、と、推、量、は、其、月、二、三、人、も、總、合、を、し、て、有、此、旗、を、な、し、と、申、

敵も有る、細く、秀吉公、此、お、旗、の、上、も、て、武、部、江、戸、と、此、旗
城、し、は、何、か、は、法、人、も、お、打、て、是、ハ、此、何、も、と、尋、ひ、其、
町、と、も、東、の、方、平、地、の、分、ハ、家、も、か、
所、在、士、屋、敷、を、十、町、と、割、分、け、
と、び、や、り、
屋、敷、も、お、く、
其、後、小、向、家、の、遠、山、居、城、せ、
幅、も、狭、く、門、塚、の、物、と、中、に、淡、石、を、
の、を、ち、れ、
此、後、
此、後、
此、後、

歴代割とに江戸城は後藤の工とく是の去を割りて
 谷を埋あげり最善後のも居りて次に川初は水除の
 土店と築芦原と刈草ありて入の堀りてあり共去と
 以地敷をあげて熱所屋を割草夫合修りて法大念の屋敷
 と西後家と取天下の赤瓦城と有り日中家の赤瓦
 築家屋となすは上下の居るは廣大にしては早見
 は中なる中田のほりれい少中より大形を地方へ海に
 事跡之細中江戸中へ天下の人民念りては田畑の良
 自由なれは鎌倉の生りて武蔵地の赤土上の
 畑を開きて新に百姓の家屋を有りて村軍ね限を有り
 然し此城内より大石屋敷町屋寺社よりありて大分の地
 敷の拓ふるれも田畑の廣り有りて十双倍なりて是は法

まても當惑も城は後一もきく尚何天下の主人紛入陣をも
 何よ一と事の欠りり事をもきく法用たりてハ新氏居
 任は安^一 右百年前関東に入ると御の拓子傳承考見
 此れも今も是の形に拓成拓ふるも不は得細くは善地
 萱原の河は後とまくと結島の地たりてさりとて此下巻に藤
 大神宮の沖浪急流も感も思ふ

一 秀吉の朝鮮征伐の何事原云は築紫先護府の津より出
 陣成りり細くは朝鮮沿海の軍勢は固永陣より退屈
 致し上りた細網のふいありて修之彼を征伐たり
 と凡そありて此秀吉は年々入赤原云利家藩を氏に
 と拓りて是も退治して彼が得るも自留たりて彼よりす
 細くは後自守の日中の法軍統大上下なる朝鮮

立派に世に居て考均航の事のご思やまは道に未練の
仁令に在るの故をまこととせしむるにあらずる
なる今な秀吉自為に後海をへ 徳川利家氏等も
同及之へ 吾朝の故に家康は沙比の何れをいふ
相考者後海をへ 此の程をへ 朝鮮の故を及中
大の金と而何の押入唐人へ 委くを切し七器
何れの時より切通へ 大の金の王とす人事何の敢
ふそあり大の廣をへ 此の利家氏等も此の人生の米の
るの世の中とせしむる可なり 呉あも或をいふ
んるは中をいふはれと人とも 快氣にたると等と極
昔の家康公の以核煙の介は換へ 利家氏卿と人よ
向をいふは家康不肖の力よりたを若年の時か余々の

親よ出合而もはて親しむとも終よふその名をたふり事
もなきに終よ今な大岡は自為トモツナを解其評は為所
後海ありらる中へ家康を人送り日本の為を仕と有
之候一糸今息ふ系へおは候に彼家康位とあがり候も
公息仕上る急な道有下仕と若くは仕候に候もはて
後海に事なを公出是に徳川友は後海に候もは 明日
秀吉公の由んよを執り入替り候り候もは 何れをいふ
りるは以之勝はを用くは中 大岡守は候もは 立腹す
まへに後海に秀吉よ執り付く候もは 何れをいふ其子細と
云へと後海に勝は候もは 何れをいふ 徳川公の
中より候は朝鮮大明の者たり日本一節へ 何れを
料と仕候は候もは 何れをいふ 徳川公の日本

の法軍勢朝鮮へ送り去りて兵糧船事の任用は
よくと云ふ事なくん夫のくをくは日本の中民の産業も
程と云ふ成程先の方後諸人の事をけき此等よくそ部
に種も種もあつた御も又もは自方より彼海に種
利家氏御ともは種もあつた御も又もは自方より彼海に種
前の軍もは種もあつた御も又もは自方より彼海に種
よめよそんは種もあつた御も又もは自方より彼海に種
と云ふ及もは種もあつた御も又もは自方より彼海に種
りとも何とも種もあつた御も又もは自方より彼海に種
道程をりて中節の望も人を取らぬ人を取らぬこと
也朝鮮大明と云ふ人と云ふ中よ日本よ其種もあ
てふは種もあつた御も又もは自方より彼海に種

目の上をく種も偏も種もあつた御も又もは自方より彼海に種
去もあつた御も又もは自方より彼海に種
柳もあつた御も又もは自方より彼海に種
仁もあつた御も又もは自方より彼海に種
人種もあつた御も又もは自方より彼海に種
と云ふ種もあつた御も又もは自方より彼海に種
切もあつた御も又もは自方より彼海に種
沙汰と云ふ種もあつた御も又もは自方より彼海に種
りとも種もあつた御も又もは自方より彼海に種
た家の事種もあつた御も又もは自方より彼海に種
一もあつた御も又もは自方より彼海に種
ん種もあつた御も又もは自方より彼海に種

とほやと云い其月の生け律義ししと云のわと大切之ひな
侍奉は急し一祝勝の心をくわとせしとあらそひ也
息也えと為しる者ありケ板の若とバ目と然ていつも
亦之家の信を玉の政と云きせとあなけなり一其
才一の才と云と云改は然と信やと云其月の心まはれ
之旨と云とも何そ一通り物なるも一方の物なり
何と云つて大は量も成者あり是も又月白然てうりまて
信ふ板よりそとて其のやうと云すなり物そ交の所は然と
あしと人この本より示すと見せ人として信ふ物より物な
りしと信はしと云よ其意ははるの所は成はるなり
此の道として上方から其の儀樂も其の心も此の
心は有るし此の儀中なるも其の心は此の料理は此の例も

町人を列座して其物は此の業子と目と云載はるし其
此の板石は内はわくは此の儀は此の心も此の意は
其年の此の春別すまを此の夫が此の夫も此の成りて今
関心初のち後と成他も高何日中も此の先利禪元と
此の意は此の意は此の意は此の意は此の意は此の意は
也と云り事も有者なれと此の何れも此の物なれとも
全紙を貯りて此の意は此の意は此の意は此の意は此の意は
人と持りて成人を此の意は此の意は此の意は此の意は
此の意は此の意は此の意は此の意は此の意は此の意は
此の意は此の意は此の意は此の意は此の意は此の意は
此の意は此の意は此の意は此の意は此の意は此の意は

に切者の山所令切りと呼集日経せし戸切後主は金根
多かり其玉の種もみ成りす一古中は埋まきま
の金根とせし一山用はまきし何れ後りもみ成
りき成後りも成りも一山用はまきし何れ後りも
のすまう又ハ形を其道に切者成者の中をすくのり
山用はまきし大花ありと云のこく上りま金山よか
切者の若多きまきし其者とも物終り仕とた
取らんとしうりま切りハ其家の不化と其金と
まのすならぬうりま切り大花あり何れ今もま
中家の業もいすも後りあとの山所と呼集め是と
て伊豆の山よ山入と後一城とせし登釈の境も
城一山用はまきし細めなり一山用はまきし

のりす大花も大花保石負のちり成武部八王寺よ
湖山よ后後とまきし金山よ城も代若と上下
与力同のこくち切らぬハ伊豆の玉汁よ石根
可く切し金山よ三依後りも一山用はまきし
石見也ケ切の所はまきし形も元見ん三
遠きくす一角のちも忘れ驕を寛修の
けくらまんわは後人編ひ云義をす
他れも其力一代のちもた記な
ふたも人山用はまきし後りも一山用はまきし
後樂の中より山用はまきし
永之山用はまきし
指されも其名も山用はまきし

秀頼とて言ふと深く此處言旨之廣長三年八月十八日
終に他界なり。此處形骸の補^た元^たを^た仍^たの^た列^たたり
と云ふ眼病あり。穢をのりて加刺のいふ入物さしとも
大岡正代の如く他人の誠万の事知り物なく功者も人も
此處形骸の石向長本をよと先云へて大谷の介抱しとも
秀頼とて言ふと深く此處言旨之廣長三年八月十八日
終に他界なり。此處形骸の補^た元^たを^た仍^たの^た列^たたり
と云ふ眼病あり。穢をのりて加刺のいふ入物さしとも
大岡正代の如く他人の誠万の事知り物なく功者も人も
此處形骸の石向長本をよと先云へて大谷の介抱しとも

此處のいふと深く此處言旨之廣長三年八月十八日
終に他界なり。此處形骸の補^た元^たを^た仍^たの^た列^たたり
と云ふ眼病あり。穢をのりて加刺のいふ入物さしとも
大岡正代の如く他人の誠万の事知り物なく功者も人も
此處形骸の石向長本をよと先云へて大谷の介抱しとも
秀頼とて言ふと深く此處言旨之廣長三年八月十八日
終に他界なり。此處形骸の補^た元^たを^た仍^たの^た列^たたり
と云ふ眼病あり。穢をのりて加刺のいふ入物さしとも
大岡正代の如く他人の誠万の事知り物なく功者も人も
此處形骸の石向長本をよと先云へて大谷の介抱しとも

秀忠云ふ石田使かりと雖も自後より江戸の凶賊(江戸道三
か)は悪事を治すまじと香取まふ川添六三傳と申若
織田信長をよませし川副式部熱原なるを大助(大助)
は秀忠香取を宿りりのわしは信長後水懸言なり

一 長四年に去大坂より於て池田三泰の輝政福清の忠実
以則細川越中守忠興涉野大系幸長忠國甲斐守
長政加友左馬助嘉明加友肥後守清正等の面々打寄
お秩して石田三成を討果して日江の宿意をせし
向後悪人の見あらしめせんとお秩りけをを容れ家
康云(一)を伺ふは甚不々然も方々及此制止は加石田家
は企てて仕止り用んと致すともお秩り大助をれ
くは来いけしと申を致し依竹大系を更依んは於て

此事をす之成り中よりとれは彼中より大坂より五三
成り完より今度の彼も理をねまかけし家康云と不
然入して一切の事をもとて是れより付定事多し秀忠
る旨の彼を致して彼も終女系物に依りて今度
の免難は赦ひて下方を新出家中の向て是る三成の
悪事と致し家康の凶仇と成候を終つた知し前をれ
是は幸の到りし今度の成り成候は遠より以後災
ふて有といひし中其状を向依候旨と藝城は此状は
いふとるれは云井大助其節を甚き節に是は見せ
所りり今少しは後此在り力入りて中依候旨の中
均此中なる事此在り藝城は此中よりこれ別
事なり申ありて中より申す事清目は醒出候て下事上

宏を述べて佐後寺の側へあり今初ハツも分るく此夜成法
詳としてしる家康公事其方夜中の出何事そと何有
り此の佐後寺のやあ何の彼とも言はず石田治政事
いかに思ひやりし中として家康公事を其夜を今もそ
かくし思ひやりして見るその上名に佐後寺ともや案塔
侍りし清忠公案は藤原の作の上として一戸上彼も言はず
お前前と長前をより其翌日かた地へ使ふとい件は
其美見に成てまへとも何とも同んそまへ言はず
いふ其海より仁那坊をいふ面を名に遊り石田は成敗
は江村言はずいり中望も何ん其上忍人の彼も言はず
天下の佐後の事とも言はず二回も言はずと
家康公より言はずは江村も石田も言はず

の事ともありし家康公も同のこ御事とも故大岡公は三
の志と戸共今今な者は江村公の立極事まへも家康公
其公と日江公使の志たまはしく押出らるる不承成
今方の彼の家康公對し堪忍に入らば今も是れ同
んら後居おしりく家康公勇上よかへとも三威といひ
中らおまへのいりし江村公の御政よは佐後公の甲斐も
なき成事とて後くいふ是は江村公を依りて説く事不及
其成事とていふ言成らるるともかくもその此後言はず
まの職もいふ所止江別佐和山も藝居て成事もお済
いふ説く事とていふ言成らるるともかくもその此後言
風況言え其上夜入して清忠の増へ言はず何方より
なく大徳の白ひ者お説すなり此も石田公言はず

右連徳和山より事勢伏の勢入りたるを以て河守秀康
とては橋原源朝の太橋とて送石田の家又太庭去徳之介
太勢徳和山より事勢伏の勢入りたるを以て河守秀康
とては橋原源朝の太橋とて送石田の家又太庭去徳之介
とては橋原源朝の太橋とて送石田の家又太庭去徳之介

右三城の國に成たる後より世傳の中河の家康公の兄と云ふは成放
とては橋原源朝の太橋とて送石田の家又太庭去徳之介
とては橋原源朝の太橋とて送石田の家又太庭去徳之介

一慶長四年九月八日家康公太坂の城へ入り西丸へは成
徳和山より事勢伏の勢入りたるを以て河守秀康
とては橋原源朝の太橋とて送石田の家又太庭去徳之介

西三城は遠近時刻如例遠近を人出送しは出出先より之を
院へ案内仕廊下とて送りは成は此を以て去方却て橋原
まのせ大野徳和山より事勢伏の勢入りたるを以て河守秀康
とては橋原源朝の太橋とて送石田の家又太庭去徳之介

扱上りし例は先く立てしる家康事件の由依の流石に遠く
吾友（と為道其威勢）解易して並るの積り遂に去
方も大徳も此目通し（と）新が故す秀頼公沙對敵の
此後教次の用は此後の通し右に家康列在を述し扱
と考るもなすす秀頼公既介此盛人の遊此息災（と）
させらば子秋并兼目物な此の家康を人の悦と存し
流取（と）此のしは入此盛りの所此の遊の事行
ふ沙此の通しは此の事此の成此の向くも其悦と考
と上り即刻秀頼公此使者を此進此後公も此礼と修也
其自ら大坂此教駕伏見（と）此の遊なり右家康を對面
此次の方まで推考の成此のもし子細（と）其子細なく右
の通しなり（と）故大岡の此遺言と立而（と）此月初の秀頼

と此のなつり此成（と）は此の家康公も此似合ふ此成と此後
既介後まじり（と）此の事行の向く（と）實證有者行向
此感（と）なり此通し（と）は此の成（と）なり（と）成
す（と）きる者此（と）なり（と）此の事行（と）一人も立
（と）此の成（と）なり（と）此の事行（と）一人も立
なり（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立
と負（と）め（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立
此後（と）中（と）入（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立
（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立
後（と）未（と）三年（と）も（と）ふ（と）了（と）了（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立
伏見（と）（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立
種（と）（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立（と）此の事行（と）一人も立

海軍中少将の法廷をくぐり大岡ふ所此恩の老より一紙書
を以て老を致しなす秀頼此の能より人の被りよ
右様の恩もたなくむ事より一紙書の名も中老よ
りとも老當の科人とも中難くは誅叛逆心なすも
事起りたる後その程に方よりも吟味致しお苗
の科よりひいりんと此返言に成其後法廷を甲刃の
初行所へは去方々常助水戸へ大徳を武付へと各
執唐紙に付洋中りりると去方大徳與人とも一紙他
物も其人世将り成りたる中自由の玉保むるも
武刃の府中へ常亭と營事一旨也成着しよ
此在り秀忠云武蔵世多し中將持しは前々此使名を
此を此書の名も此菓子なく此者信成後より江戸の此城

もはたあ此恩をふ所洋中も此次中將も此洋中へ男子三人
有り想もあつた常史の森督しと甲斐の武のまより
二男但馬も其節之常史と秀頼に此不姓なりなり
常助大政もよなつて左常史より三男兼女流と云ふ此子
た多かれ何よとも初行へ入用をせんは信成原に此願
知し内常助常史の城より万石は法廷法廷に此願
た常史三十八歳とて死云男子云々也但馬も此の常史
も成る保く此間より万石の三男兼女流と云ふ此常
史りて一紙書に常史代並の初也
一、長六年上杉常勝此退治を六月十八日家康公代人と
此之に成大津の城とて常史宰相此信と就す其後信成
此旅館に白水口とて城より長米大徳を此信と就す

兵糧山下如取日比富主より方逃るに用よおさす下りの戸櫓
付一たし大石一同より移るるたれより事存く事とすし并修め
以方より今月する山是道阿保是江音とん口今者節と
通天す石を以油杭を斜に地を棄積をたると以逃治て炭
りや又上方出流おと以征伐て成や以方者お秩を立懸一
りりその作し福清庵の事更向甲斐と由人一度く出家先
中へお秩して先上方を以逃治て成て地を以流し山内
封馬より掛川の居城と明可中より由人叔と法入由人安
以上流て遊もお人質とて八吉田の城へ移す下ると依之
海道勅治城を以方とす右大坂路初より流を方より有
之申すも山内封馬より内室が士と飛脚は仕立て移すす
流方の流をよりもよくおるをんお連流言と共と合くお心を

そも流の方一高より中上の家康を基に感抗は難とすうこれより
関ヶ原の戦い勝利の後上方大谷の慶次も別も以加恩也
異なり

一 参州池程新の驛より移り堀尾常刀加賀并流節より水野
宗重を討果しりり常刀通り合て印を以流節も
切むむは故具成り流を以流節も其流上方より飛脚下る
方よりお飛脚を付すく小山守部言以流節も移り流節す
依之風流より堀尾常刀石田と志と通し加賀并たより水
野をおむり流節も以流節も其流上方より飛脚下る
依て不及同んも其流節も以流節も其流上方より飛脚下る
一 以流節も其流節も其流節も其流節も其流節も其流節も
依節節より節節節とすく唯今も其流節も其流節も其流節も

通人と法人私と也并伴中ある人お供して此中陳(新)
彦よいふと云上して事く実告おせ(此と信初陳
屋を與人の家を以て我をばあはんやと甘何妙の家康云
か時此の家を遊石に仕出たりと信初の彼をたす者下(但
節刀より持てて我をよめまして上より下通守り考めあ
らす定ると昨日中よ此は初事(此事方信法ちよん
立(うらまはし)上をそれいの人(此をばあはんやと信初の
次方あ細云上(飛柳が来して其子細く初(并伴が
多縁こと(此後)下(此)家康云の能く人と知(一)事)
ころ(依)を(感)こ(

一 八月廿三日濃船改阜の城を攻むの由先手詰りより江
をく状(同)月毎日(由)名九月朔日江府と清三(此)成(雲)系

表(此)を(表)は(遊)別(濃)船(改)阜(此)を(和)以(友)村(瑞)雲(と)す
小流(此)を(腰)と(す)然(任)村(此)地(之)の(為)大(守)村(と)云(よ)然(て
表(上)る(家)康(云)清(三)は(成)則(清)側(と)云(右)伴(是)ハ(任)村(の)心
付(て)し(江)信(清)依(の)思(地)原(云)妙(は)右(寄)是(ハ)守(守)り(又)流
の大(材)く(と)方(了)し(と)相(後)や(と)の(流)よ(せ)ぬ(う)と(り)作(一)言(を
此)在(教)(之)の(を)せ(流)ハ(竹)並(家)を(の)れ(よ)後(と)清(三)は(成
既(介)御(撤)垣(と)く(守)守(り)又(流)の(大)材(と)小(姓)た(ら)ま(り)を
して(坊)修(く)ら(う)と(云)を(行)り

一 九月十日(有)関(下)京(此)を(表)は(信)初(利)の(成)山(後)悉(後)家(改)れ(れ)
家(康)云(穿)捨(山)よ(此)を(守)り(成)清(曾)と(持)系(と)し(江)信(人)皆
修(守)り(又)よ(清)三(中)と(す)為(清)甲(以)右(勝)て(曾)の(流)と
志(守)り(と)す(や)を(此)所(な)り(と)の(と)定(り)り(此)所(先)の(思

由の病将系烈して沙流成と申すも家康も各
御骨と云はる事以て感懐お沙方と仰こは所(松平
下卿も後藩も云ふ所負ひして此目見升候事於て流枕
の事と負腕をとり首よりけ回く此節(おくもやち後
此目力も物と云成たる言として云かく送物の寫の子を
送物と云はると相見之んも云はれ家康も云はる事上の
寫通らりりかふされをこそ云はれ所お沙流成候も云はる後
と云云那お捕らひもつゝ此案と下下之し山岳及河原
系上して滅候の御ら振も云はる事沙流成と仰せも
て此も云はれ家康も云はる事御候もて日出の合紙を此
より一様と云はる事此は流成事云はる事此は
云の上流して書すと云はる事川原と云はる事上は晴園を

云はる事一と云はる事云はる事云はる事云はる事
云はる事云はる事云はる事云はる事云はる事
云はる事云はる事云はる事云はる事云はる事

一 永承の沙流成と云はる事云はる事云はる事
二人を若るは表坊の事と云はる事云はる事
満子の軍勢候と上京して根籍をく改事もや可有と
云はる事云はる事(お觸)と云はる事云はる事
清(お誠)日の事と云はる事云はる事云はる事
三人是てお誠と云はる事と云はる事初書候は福清候事
使志し士方所の事云はる事云はる事云はる事
大指と云はる事云はる事云はる事云はる事
高り云はる事云はる事云はる事云はる事
云はる事云はる事云はる事云はる事云はる事

天下の國所々有るは皆て理意の沙汰より始るべし何れも
曲て信忠と信仁共謀りて之を謀りては件首虎よりん
不及力と云く切腹と遂に相子ハ信忠為書ありと云て
死りりしに在りて是は是と云て死て極くの事新証と申す
家康公の信忠を殺すも是は是と云て加へ者人中裁
人なりともおのりてう致信忠の仇なりといふも
正則公の信忠を依て家康公の為書に切腹は信仁正則
半今な流りしは福れり軍忠首と云くなりと云
功は信仁の謀れと信人江沙江信仁向補家康公と云
知より思はれし下有は信仁と云く信忠公の利運より
ても未行なく沙意は信仁の由りては信忠公の
長本石田小西なるとも信仁の知事と云く信忠公の

を意と成りりしやとも信忠も有りたりと云くは後上方法
大石沙加忠を初毒瘥後而國正則は信仁と云くは
為も信忠公の謀れと信人江沙江信仁向補家康公と云
去政意と云福信半ハ天下の存る大忠と致せん人こ
ても為書りし家康公の事なれしは信仁の
信忠を信仁の謀れと信人江沙江信仁向補家康公と云
なりぬるの事れし今度大國と相成は信仁の謀れと云
信福信仁の力大忠と云くは信仁の謀れと云くは秀忠公
沙代より正則沙降目と云くは信仁の謀れと云くは
なりり信仁の謀れと云くは信仁の謀れと云くは

一 九月廿三日田中兵衛が捕りて信仁の謀れと云くは信仁の謀れと云くは
報へる事ありしは信仁の謀れと云くは信仁の謀れと云くは

東軍殺しつゝ以後伊吹山の嶮路を渡り、若狭まで出た
とて道より腹中を憩ひ、樵夫より木の根をうへ、破きつゝ兼
衣と着て、腰に鎌をさし、岩穴の中へ伏し居たり。搦
手りや上段すまゝ、此の如く伺ふ人、大忍達の勇まし
何方へ出らざらん、なれば、人若狭州へ根と移りやと
以未練の男よんと、これ、家康公に伺ひ、勇と令や
て、あそ、未練と云ふ、心す、よく、賢作と云けて、若狭に
一、あそ、不目也、と、此の如く、仁と、と、仁者、か、不目也、
此の如く、若狭と、と、此の如く、鳥井久重、う、若狭、あ、仇
と、あそ、あ、と、江、信、望、目、か、多、井、方、(此、此、け、此、此、と、と、)
一、福清、在、安、た、正、則、在、此、備、後、与、國、相、願、し、く、入、部、の、伊、礼、の

乃、と、と、と、と、所、も、家、危、三、人、の、若、狭、伊、目、見、は、信、目、し、一、あ、よ、伊、
後、備、後、室、徳、の、城、を、福、清、丹、後、大、な、り、ち、ん、と、し、二、あ、よ、伊、後、
二、好、狭、山、の、城、を、尾、実、石、見、乞、は、三、つ、と、し、三、あ、よ、伊、後、東、城、の、
城、を、去、尾、軍、人、片、目、を、ひ、う、う、う、と、し、出、る、家、康、公、伊、後、
列、辰、を、し、れ、た、る、思、お、姓、旅、の、内、よ、保、う、保、て、知、ひ、出、せ、り、人、
有、之、右、伊、礼、お、涉、は、後、家、康、公、思、お、姓、旅、の、方、(向、を、是、れ、
大、よ、伊、立、腹、遊、び、今、福、清、の、家、を、た、と、ん、と、知、ひ、け、る、ま、
何、り、ま、や、定、る、三、人、を、う、う、伊、柳、を、れ、い、ち、う、う、ひ、て、
知、ひ、り、う、う、人、間、を、祝、も、人、と、何、所、也、何、所、也、何、と、は、出、し、
何、所、也、是、よ、ま、う、ん、と、計、ら、う、と、し、三、あ、よ、今、の、三、人、武、篇、
備、後、有、之、大、別、の、義、士、を、た、す、れ、い、ま、福、清、の、家、中、よ、て、三、
力、を、仕、込、り、て、家、を、ま、て、信、う、う、後、よ、家、康、公、前、(此、此、)

礼を修りては武士の名をきれ、世傳んまも世傳あやう
なとあふんあ〜こ〜き〜事〜事〜有る教〜何とも思ふぬ
分別〜事報りて是の〜と〜思ひぬ〜と〜思ひぬ
を免れ〜事〜成人の遂る〜と〜世傳〜名と〜思ひぬ〜
事難成る〜一〜思ふ武士の生れを流るぬ行傳者も成
と念念と究極〜武篇と拵ぬものなるを能く念念
信ん〜と〜信二三日の間事機極〜と〜思ふ成〜と〜
一之河与秀康卿此の河内勝地也此を久〜河内流事生
あ〜と〜思ふ事機極事機極の事此の乃よ也城下有るの故
分て家康公此の事機極と拵〜事機極の刃也此は信長
南日よ事〜一之河与秀康卿此の河内勝地也此を久〜河内流事生
此の事機極也此の事機極也此の事機極也此の事機極也

事難成る〜一〜思ふ武士の生れを流るぬ行傳者も成
と念念と究極〜武篇と拵ぬものなるを能く念念
信ん〜と〜信二三日の間事機極〜と〜思ふ成〜と〜
一之河与秀康卿此の河内勝地也此を久〜河内流事生
あ〜と〜思ふ事機極事機極の事此の乃よ也城下有るの故
分て家康公此の事機極と拵〜事機極の刃也此は信長
南日よ事〜一之河与秀康卿此の河内勝地也此を久〜河内流事生
此の事機極也此の事機極也此の事機極也此の事機極也

指巻と清く家康と云く教と秀頼のおよむなりと申一初
はるゝ入ての事好むと云く叙あよ勤してあそ歌をれ秀頼
のあつと忠の志こけ更今度の一礼も修理と申申あて出
世な京もよ付く 彼早の城とせ丸園と京春の合戦付と
石向よ向ひて人より先と夫の一初も射然なと云て海城
よめ取まて先子の福清の備とかり自方河内を印たつと
討たる方よりとあて水戸をぬく叙あまとして少あ相
城前田利長と相斗あ事味方の勝も成るると申ふ
是又一慮の御ことと忠徳と云く捨るとよと云す此やばこ
前ち坂巻と云く家康と相斗はと秀頼のたよ成るゆと云
あつ語まると彼をれと忠徳と云く記事よあてす事いばな
の忠徳と云く一と云細をくははらると云く

一 山居祥園をり程おれ相織の可く破れると悪用して御前
は出りると家康と云く清徳と云く祥園と云く相織と云くはは祥園あ
は相織はあ松院と云く清徳と云くおれはと申上家康と云くす
すう山居坂巻と云く相織と云く忠徳と云くははと云くははと云く
一 家康と云く清徳と云く清徳と云くははと云くははと云くははと云く
松下たあて申人あて或付清徳と云く申申申申申申申申申申申申
清りよと云く何と云く申申申申申申申申申申申申申申申申申
月日よと云くあつと云くあつと云くあつと云くあつと云くあつと云く
やと云く清徳と云く家康と云く物類と云く申申申申申申申申申申申申
あつと云く何の事と云く清徳と云くあつと云くあつと云くあつと云く
あつと云く清徳と云く申申申申申申申申申申申申申申申申申申
あつと云くあつと云くあつと云くあつと云くあつと云くあつと云く
あつと云くあつと云くあつと云くあつと云くあつと云くあつと云く

れおれをこれ一を我おん入る成程の事なされとも思ひ
寄て内々申付語懐く調致く時おれん合我おん思ひ
あふ志を何よたてん〜ま事々用よ三てたて用よ
立給もらうねま〜とてそのおと想おれ〜我身のおも
と知くねたし抱きた少力なり若らんあま友進侍事な
と有物おこしあま力の思と云て吟味穿鑿と遠りぬ
よ子前の思ひ故人よつとて改嗜のまのこは
力の徳し相又た力は何と持言たよのよて友進朋友と出
合てんあ〜語らん〜極となられ身の言思と吟味さりと
云るよか〜日初初言の抱えぬ〜皆家母た斗をれ
た〜この事とわすむとを〜てい〜とさぬようが〜の語
こ〜語らた意語うと抱り〜これ〜改〜と云ん〜ふけし

さるの多き若し是ハ早亮太力の抱と云〜凡人の上よま
て下の誅とふ若者の因致失ハあれ何〜さるま今たし
〜と〜依後ちぬり是座〜或時子息上野助〜語り
すま〜病後〜及上野助と書わ〜つ極の文言と書
りそ〜人々非〜と〜流とす〜と書付の文言と書と
〜方す〜目よ〜と〜と〜と〜と〜

一或時駿府〜家康公許泊留那とて成〜と〜川前川
の流事と不き上野助ぬりなり〜時を伺らる〜唯今
流狩場〜は石連は女中宗然馬よ〜流依は信付りた
南河天下も一統の故〜は〜向流ハ何致す物よ
は直進〜流をぬ〜と〜家康公すな〜何よ〜と〜方中
士ハ大女め〜と〜時〜の〜流お〜御と致事〜行要

なりしはまゝお力の所を新事法に於て少辨はばその先を
作法有りといふも中にも又町亭より後して能く
とあり先と極中云なり又大身の上といふ新事きく
町亭より後先作法を道とも一向に於て少辨なりと用る
ゆとりり先極中し極る物の他法は人くは位分派は
大方定といふもゆくり依て極中必きりあなり
と心の極中何事も一篇は念法事い富友汝は夫大
名の所とばといひ一向を執とれと云斗とてこれ一太ふ
為といふ士の愛の取人なり世身言のの時なりとて力を
あまの事をもとてまきけて係の事の用とてまきいよ
より常より力とせし事なり能くさといふと作と野ふと
ゆくりありとて事もなぬゆくりも極中極中なりとて事

とありとて常より宗物とありとて力馬より宗自力名とて
今世康と祿なり所ありて山坂と極中水ともゆくりと
家中法人の働といふなり是も又太極の念法事の一とて坊
てや家中の極中いおきて法を執り極中も健なり達
若も極中たのめとて山坂のありとてまきいよなり
時の念法と成るゆりも一能く太極の特場といふ軍の
内りともゆくり能く軍中といふ女を連て不極中極
の極中念法と極中事なり侍紅の女をつまといふ
ま太極物より宗物より馬より宗のまかきとて法をゆり場
なり宗物より宗女と宗然馬といふ法は一版相親の事
こまきなりとて新事よりゆくりありとて石竹版と能く
ゆくりとて極中なり

一或河野河の沖城より暮乃を徹るまう白雨物交雷の
聲頻々鳴りし時、雨前、雨後の形を以て、
時を以て、
或は、
と云物斗ハ竹子ハありありと、
何
を揚て、
唯今上意の、
つり、
教ん、

より者々、
の、
あ、
ま、
切、
因、
集、
らん、
町、
と、
死、
る、

一 流府の清水水より源川のありはたう成法定より付す清水道と
見立日向下と名を三と家康公清水持の刻清水自方見分
は遊りしと水節小寺ありは寺内と仰りしうあを廻
は所より侍と揚は依て家康公沖積を為すお付与を
中して水と名をいふ入事と名清水側の中を清水の
依りしを介して代地と名寺と清水せうはておしり
家康公清水用也と云も用也よりての事清水（あを）
ありしをいふ一層の事と名私事の家康を人
目と名目んが為しな来乃もと改めゆりて云事一と有
寺内と清水の揚してあをかろるをいふけと名上
名ありしと

一 流府より清水節より出く時たの側より東に揚りたる地

一人雅子公抱く流府より家康公清水流を成あせは行者よと
何れは流を急流ゆくと名をいふ流府清水流を成あせと
子細公節よりいふは地より揚りしを来あめの見しより立所の
名をいふ流あまのやまといふ大事をいふ一は流揚りし
一の代官板倉大のぶら河村は流大をいふ曲事といふ流府
二年より立所（河村）を用は依りて所をいふ揚りし
内よりいふは流をいふ立所を立所と名す（流府）
なくし流を流府と名すは流府より流をいふ流を流府と
す下より流を立所の名をいふ一の代官す（流府）
家と名をいふ流事と名すは流府より流をいふ流を流府と
流をいふ流府と名すは流府より流をいふ流を流府と
流をいふ流府と名すは流府より流をいふ流を流府と

合めてあまの目よりあがりおぼくさるものねえ家と能くあ
つては故と能く上なるものけりともを判

一家康云後府の忠義は成事の阿波秀忠を信用し汝有きて
此家中の月一人は老主人左府に申す所前此は忠義
と故と能く別上なる有りたる方事將軍に申す所
して後事にも用とも易し申す所なりてしるべきこと
そなたの用事よとさ方故と指談するも早もりの氣
よ入とくも云と初をすすともいひ難成故をりて一段の
夫よりいとも方なりて入大事今もゆていとも習印ね
ちもあまの忠士を將軍の情と感し新事さかるといひ
悦ぶよと故と又恩と信をうけし思ともあなうともあ
のこもりねえ故さんとさ方なりてしるべきこと

故か一も一主の目を見せよられ我々もさ小驕の心は事
古今の人情も忠もいつとも境もなき付物ねえ我々も
者ともいへねれ他人の目も能く見ゆるもの者なりけり必
為りとも云者も形もあまの忠もいひぬめりとも念して前
より用を梅之の氣に入懸りぬりぬり益得ともさ
我々もささうりねえい侍事の変りとも依故目見ぬの心
ともなれともさ老の人物に入と見ぬ將軍のねと大切よ
ねれとも云故一後とも人の目も能く見人なりともねり
益りねえともいひ老なりとも何れ我とわねは成老ともい
ひして目とさけりとも云の故あまねしりか能く我と
中密も老主人もいひぬりよと申す所の老の彼も論まとも
れ一も云ともは我獨ぬれとて新事にも向他人の

いらいは愈々一人して事と成さるべき時と咄さるる所は有らん
主人の大きなる病といふ者も其病の心入の者を何れも智
者なりとて尚ほ其病の増ゆるに有るても事免何の故も
あまざるをといふ一子細い字物も有るて有りくは力と
せのうらやと持るるもたかた先ん人してうつきを介添肩
として治えとく者たしくも成力と付さるるも者肩とく
歳人と治えよと治してしそある成切不捨難を病も心安く
字といふも如何に清きとてと字物一人してはかたまぬを紙
うけしとて字ての者の心と不安脇く見ても先しその
ましく天下の事と保と云ハ取のゆく言のなりと揚り揚る
としては如何と有りは下といふ取のゆくぬお治お
と歳人といふひあけて宿願とありてまも先たり力と

と金くしそ事と保つて事成り他人をす親一
人してまの病のゆく人といふも其病の心入の者を何れも智
者なりとて尚ほ其病の増ゆるに有るても事免何の故も
あまざるをといふ一子細い字物も有るて有りくは力と
せのうらやと持るるもたかた先ん人してうつきを介添肩
として治えとく者たしくも成力と付さるるも者肩とく
歳人と治えよと治してしそある成切不捨難を病も心安く
字といふも如何に清きとてと字物一人してはかたまぬを紙
うけしとて字ての者の心と不安脇く見ても先しその
ましく天下の事と保と云ハ取のゆく言のなりと揚り揚る
としては如何と有りは下といふ取のゆくぬお治お
と歳人といふひあけて宿願とありてまも先たり力と

一家虚云或時此旗を故人のあまのりより治るるうは治る

思ふに井大徳と云く何事半の人物か或考すべし
尋らば大徳の語り其考を常く私方へ入るべし
以故か何れの人物の考と云ふは只今と云ふは
唐云沖城極悪と云くは只今と云ふは只今と
不解ふ彼も人物と云ふは只今と云ふは只今と
侍軍の吾思と云くは只今と云ふは只今と
向く志らぬと云ふは只今と云ふは只今と
誰中人の中よと云ふは只今と云ふは只今と
てとれ——と云ふは只今と云ふは只今と
少知て是と云ふは只今と云ふは只今と
人をれいしとの道よと云ふは只今と云ふは只今と
れ——と云ふは只今と云ふは只今と

事と有考と云ふは只今と云ふは只今と
るの思ふと云ふは只今と云ふは只今と
足ふと云ふは只今と云ふは只今と
なしたむと云ふは只今と云ふは只今と
永をたすと云ふは只今と云ふは只今と
まぬと云ふは只今と云ふは只今と
たと云ふは只今と云ふは只今と
物名は只今と云ふは只今と云ふは只今と
情と云ふは只今と云ふは只今と
何れと云ふは只今と云ふは只今と
人よと云ふは只今と云ふは只今と
たれと云ふは只今と云ふは只今と

とちあらく思ふべきありて、
氣立と知らざる考申、
後者立為と云ふは、
の諸士人立思ふ成端、
よなきん凡人局の九氣を衰て記する、
諸士知と知り義と守らざる家の九氣をりて、
はなして知と不知を、
とくよぬけの空の思と、
をのよありとも、
教化法礼を、
急にお答へんと、

一家康云、
法蓮の言を、

法蓮云、
此を考ふと、
此の法蓮云、
人の子のほ、
子の徳と、
て今世と、
ま子の悪量年、
今と可貴、
そのなき、
親世局の、
身と為と、

に家氏継ぎの家の恩を承継し、後、家氏を継ぎ、
元祿より、存続の故、いふに、
なり、
氏、
所人、
相、
一、
本、
の、

合、
一、
か、
百、
P、
知、
あ、
波、
を、
尾、
城、
P、

武蔵守方々家貞池田越前之城筑後南紀越後等々武切
有者たよ人教と名流は見えしは城々者並に先賢に
流して加勢と別れ彼も城中へ入彼も難成方正言ふ
片桐人教方先代は上とありたる筑本方下と
して退ふ一揆より一揆にして大坂方も流し
かりたれし伴丹とありたる片桐も勢沙を討死と
遂り也主初世上の丸沙流も尼ヶ湊城中の老た不慮し
信取前代未だ此の池田家か加勢と老た方り今なき
信合もあつた不慮なり也何れも主の武蔵守大坂(内通
と成りてやせん中福なりしは皆とん家康の武蔵守
と惣教の丸沙城中と教人との事と流し流沙和
略は二条のおお城尼ヶ湊表の流し流沙上り武蔵守

家康の内より付大膳より老た方り流沙上り尼ヶ
湊表の事首尾流沙上り流沙上り大膳流沙上り尼ヶ
湊の流し大坂流しとありしと西國通用の地も流し大坂
へせり交り三流しとありし何れ人教と指し下と流し
流しと流し大坂と流しと流しと流しと流しと流しと流し
交り片桐の手流しと流しと流しと流しと流しと流し
中よ大坂流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し
城守もその流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し
大坂方と流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し
依り流しと流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し
一の人も流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し
有るは流しと流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し

より血の流るるとちつとも不構な命をきて退き揚初一國
の言しをとも彼大膳の御之を若の子程有と今の太膳を
主の存身と不構への御門と見るあり尚討敵の命(出
唯今のとく成事と言ひ若くは元より武蔵の他人
と構し上りて)

一 大坂に在る此の別ち大坂城の中程に坐りてひりりく
大なる籠上りと家康の榮印山に陣取たり此の遊軍旗本
の諸人衆はとんくまきや此の遊軍と名付て候しと討家
康も亦大隅の末の上方と大隅の諸將も衆討あり
んよとの上方と大隅の上方と一見してを此の遊軍と
よ此の遊軍と此の遊軍の中程と遊軍と名付たり此の遊軍
成り候の初めやとありあり家康の字をとりつとてとる方

平を秀頼の初月有候をまはらねあり候しよの上
りてと後此の遊軍中(と大隅の遊軍は出陣候しと候
と)

一家康の諸將の討に百仕りての市中がく遊軍と
仕ても此の遊軍と名付て大形の中程をとり候
と名付て此の遊軍をとり候しと名付て候しと
細たかりととも男道の遠く候し又此の遊軍の首尾不
合なり此の遊軍と名付て候しと名付て候しと
此の遊軍と名付て候しと名付て候しと名付て候しと
候しと名付て候しと名付て候しと名付て候しと
百の遊軍と名付て候しと名付て候しと名付て候しと
の成り候しと名付て候しと名付て候しと名付て候しと

將志考は成ては位出りりるま方の永保寺也卷々源氏
康六十案内介子氏改共七斗の時の事なり一徳を
ま方事々も合戦の別は六条の所なり一徳合子事
の事と申老しそこ三退と申はも御教文二目と申と申
事と難成程しそ此後の上意と申か程の仰りかきり方
依と申老一人と申も家中よあまを法旗本の風俗と申
お成老と申有りはは重なるは信守の上意と申は新事
市用扱のといひは事多中在也近門の中次の年月月
沖他界取と後と申沙はをりはるく安斎節力扱は
一太坂沖練の已は後府沖城に於て或秋少松の所沖前
江にありり家康は信守を扱お事者と信のといふ天下
教本の書中よ生連年有記時より明言合戦の評伝と云

つ力と号し一孝文と勅し一事と云れは如教文育は
まも一一句の要文と云えて是と云ふ句よ志ます
二品書流は立城せし一若より天下一統の今よ到りて
件の一一句は及理は依く南家策剣の功と云ふより相右
の一句と云は聖教貫傳佛法中よ何の書よ如何程の
句よと云ふことやま方より考てみるは信守時沖前
何々の流の中よと孝文育と云く是よと申るはあま
よと申るはと云ふことやま方より考てみるは信守時沖前
てと云ふことやま方より考てみるは信守時沖前
家康は信守と云ふことやま方より考てみるは信守時沖前
おとら聖賢の詞と云ふことやま方より考てみるは信守時沖前
知れども扱おる文育は及理の事と云ふことやま方より考てみるは信守時沖前

り去れと執りし思とて此と云ふ一句と若年の時
すまへくなくんは志違ふ事もと小半よと用
小半事より多しこれ大秘文をれと今日者（お侍
よりそくは清知ひはせらるるこ

一家康云右の清子の指中一良言をうたてり清年
よりせしきて程こりやと伸もいと後府の清城よ
清なり時見小枝の中か氣と有まやうくとりてんこと
一系増ぬと手あくる旅のりとすは家康云清若記時
清珠の友より合戦初り時良始の程は清再おとく
清と知れ成とま（も名成りてたのりくとも清二
ゆいと清鞍の形物と多うのたうせらるる有清指
のきくは血流のりと清ゆ珠有くは清療治と成つとも

清疵やまといふる内は又清珠有の右のこくは遊り清
疵破れく波し後より甚く痛は成りしともまは
のそんていかと云えく（お名成りぬあのことくをり清指の
まよはわ成りしと清り有者ともまらりとこち飯麦
清珠と清一生のり大小の合戦も清名を事早しなと
くや清取りまらこ程遊るる考也

借熊谷氏本

文政八乙

酉夏五月十四日於宇土郡網田村寫之

中村直道

荳蔻錄卷之七十五終

荳蔻錄卷之拾五終

